

る兵の多くを死なせました。悔んでも悔やみきれません。

—どうも有難うございました。

歩兵第百三十三連隊 衡陽攻略 の死闘

三重県 浦田 幸一

—本日は第一三三連隊の衡陽攻略戦で、第一線で直接戦闘に参加した、生き残りの浦田さんに細かいお話を伺いたく参りました。

企画をしていただいた、当時の連隊本部におら

れた萩原さんにもご同席をいただきました。

浦田さんは何年徴集兵でしたか。

大正十一年一月二十五日生れですから、昭和十七年徴集の現役です。同十七年十二月十日、三重県久居の留守部隊に入営したのですが、徴兵検査で、内地・外地の希望を聞かれ、当時私も張り切っていましたので、

その時点で「外地希望」と言い合格したのです。

十日後の十二月二十日出発、朝鮮・満州・北支經由で浦口から揚子江の対岸の南京に着きました。南京で正月を迎えて、上流の銅陵と大通の間の鉄鉞山という所で編入され、六ヵ月間教育を受けたが、三ヵ月が基本、三ヵ月の実戦を交えた教育です。夜間の戦闘や歩哨にも立ち、討伐にも度々出ました。そこで実弾の音を聞いて、初めは頭を自然とすくめる。その討伐で初めて、ヒューンヒューンという、高い弾でもです。

私は第九中隊（第三大隊）に入り、西口少尉が教官で、その当番になった。教育中も、半年後の常德作戦の時もそうでした。この作戦はひどい作戦だったが、昭和十八年の十一月雨期でした。

明日総攻撃という前日、西口少尉に付いて、上陸地点を偵察に行く途中、P51戦闘機の銃撃により少尉は足に貫通銃創を受け、漢口陸軍病院まで、私も一緒に下って、早く内地還送された。

そのことが、私にとっては運が良かったわけです。常德へ行ってクリークを渡って総攻撃をする前に病院

に下ったので命があったわけだ。渡河戦は昼間で皆やられてしまった。まともに対岸に着いた者は少なかった。隊長を入院させ、私はまた作戦に参加したのだが、常德城には入らない。

嵐第六二一四部隊（歩兵第一三三連隊）は作戦前に甲装備となった。路は秋雨の最中だったので泥んこだった。夕方、陣地を出発したが、朝までに二キロしか歩けなかった。歩き通しだが進めないのだ。道といっても石畳ではない土の道で、雨は降りっぱなしで、馬が通ると穴が出来る。そこへ、我々の足がのめりこむと倒れて立てぬ程だ。トボトボと目的地へはなかなか着けぬ。田舎道だから途中で随分と難渋した。

―それでは本題の湘桂作戦の衡陽攻略について伺いましょう。嵐兵団も、今伺っていた常德、衡陽、芷江と、昭和十八年から二十年にかけて大きな三つの作戦をやったわけだから、随分犠牲が多かつたでしょう。

その三回の作戦をやったので、生き残りは少ない。常德戦で負傷者が随分出たのだが、負傷者はほとんど

帰って来ない。そのために湘桂作戦の時、大正十二年生れの、昭和十八年徴集の現役初年兵が補充された。

昭和十九年六月二十九日、我々の第一三三連隊は衡陽攻略のため到着したが、福知山の第二二〇連隊が先に出て、我が連隊は後陣に廻された。ところが第二二〇連隊の攻撃は頓挫したので、我々第一三三連隊が攻略に向かった。第三大隊長の小野大尉は「我々なら三日で落して見せる」と張り切っていた。

我々の連隊長は黒瀬大佐で、第九中隊長・福原中尉、第一小隊長・池崎少尉だった。第十一中隊が二三高地を攻撃し激戦で全滅してしまった。そこで我々の第九中隊に攻撃命令が出たが池崎少尉は戦死した。大隊長の小野秀男大尉は三三高地で戦死した。代理は西口中尉になったが、幹部がこの辺の戦闘で戦死したり負傷した。

第九中隊は四〇人ぐらいになってしまい、小隊は四、五人になってしまった。中隊といっても、教育中と違って、全員が一緒になることはほとんどない。命令を受けても、各部署に分散しているのだから演習のよう

にはいかない。援護は機関銃だけで、決死隊を編成、三浦見習士官を先頭に四、五名です。

三浦さんはこの時、初めての戦闘だ。それまでは患者収容などをしてきたが、手榴弾と小銃だけで、決死隊は私のほか数名、隊長の見習士官は実戦が初めてなので戦争を知らない。第二小隊長になって初めて三四高地の決死隊になった。隊長は古い兵隊に実戦の仕方を教わって動くだけ、指揮や命令だけでは戦闘は出来ない。

三四高地の攻撃は何故昼やったのか、そこは谷の窪、低い所で、三四高地の山麓にトーチカがあり、砲や重機関銃でもどうしても落とせぬので、昼間決死隊攻撃となった。単独で第九中隊だけでトーチカを奪うわけ、中隊の軽機関銃だけが支援した。

―それだけの兵力でどうしてトーチカを陥落させたのですか。

どうして三四高地のトーチカを奪えたかという点、二二高地から三四高地へ攻撃をかけ未明に取った。二二高地は第十一中隊が全滅したので、第九中隊から下

士官等が行って占領した。ところが三四高地が前にある。二二高地と三四高地の間に窪みがあるから、袖にトーチカがあるので、二二高地からは銃眼には砲もきかないということには前に言ったとおりです。

トーチカを三浦小隊は匍匐でいった、真昼間で敵から見えるので、軽機で射つて左へ、死角に回った。トーチカの中には一〇メートルぐらいの円形の部屋があり、その中に銃眼だけくり抜いてあった。我々は銃眼の無い所、死角へ近付いて私は手榴弾を発火し、早く投げると、こちらへ投げ返されるので、発火し五秒たつて投げると、遠い所なら早く投げればいいのだが、トーチカにひっついて銃眼から投げるのは危険です。手榴弾を握っていても何時爆発するか判らない、一つ間違えば自爆してしまふ。

全員死角に入つて、うまく投げ込んだ。二発投げたが生きてる様子はないようだ。裏から入って確認したら皆倒れて、中の敵が数名死んでいた。ところが、そこに敵がいて格闘になった。狭い所で敵とバツタリ合つたのだから、敵も白兵戦で必死、隊長は軍刀を振り

回すがなかなか斬れない。私はこれを見て、一発ぶちかまし銃剣で突き殺した。殺さねば殺される。戦場とくにとつさの白兵戦だから。

その敵はトーチカにいた生き残りの一名だった。突撃の時は目標を見てやるのだが、急にばったり合ったら、機先を制した者が生き残れるわけ。小隊長は初陣だが、度重なる実戦が役立つ、理屈抜きだ、場数を踏んで自然と身につくものだと思う。

連隊長は高い所で戦闘の模様を見ている。戦闘詳報はそのようにして書いている。トーチカは取ったので、三四高地へは第九中隊が突入し占領したが、我々の中隊はここでも沢山の犠牲者を出した。そこは蜜柑の生えている丘だった。

(七月十六日第九中隊戦死五名で戦力はますます低下)

—今、萩原さんの画かれた戦場の図を見ながら、お二人から説明を受けているのですが、だんだんと敵陣地を陥していったわけですね、最後の目標は何処だったのですか。

第一三三連隊の最終目標は右翼にある岳嵜山だった。各連隊、各隊が一線になり第二線に交替したりで、段々にしていった。我が連隊も二四高地から三五高地へ移っていった時には相当の戦死、負傷者を出したが、三五高地占領後一段落した。五五、五六高地の時は飛行機が徹底的爆撃で破壊した。あの日十六時五分、戦爆連合機が急降下していく……(第一三三連隊史を讀む)。

その時、我々は三四高地にいて、五五、五六高地攻略には参加しなかった。今度は第一大隊の五五、五六高地を通過し、我々第三大隊は五七高地を攻撃した。作業隊が来て爆破作業をしたので、我が第九中隊は占領せずともよかった。ところが五七高地から五八高地へ通路があり、五七高地の大きなトーチカで戦友の松原光雄が迫撃砲で左頭を半分はぎ取られ、数時間後に戦死した。私たちの所に、敵の飛行機が弾薬類を投下していった。

米空軍は、その陣地がまだ日本軍に占領されていないと思い、中国陣地のつもりで、誤爆ではなく、間違

って補給のため弾薬の梱包を投下したのです。食物な
らいいが弾薬では、特に敵の弾は我々の銃では使えな
く残念だった。とに角、我々は弾薬が不足していたの
です。

五八高地へ攻撃のことだが、同年兵の工藤と四、五
名になって高地へ辿り着いたが、五八高地から弾を一
発射つと、三方から何発ものお返しが来る。前方に池
があつて進めない。ところが八月三日夜のうちに池の
水が空になった。その時はどうして空になったか判ら
なかつたが、後で聞くと、連隊命令で堤防を切つたの
だつた。水が無くなって池の底に鮒が跳ねていたのを
思い出す。

敵陣トーチカを攻撃するのに、夜間、工兵隊が火焰
放射器を使った。我々は初めて見た兵器だったが、火
焰のため昼のように明るくなり、逆に工兵隊に犠牲者
が沢山出た。そのため二回目を使うには大部モメた
ということの後で聞いた。我々第一線の兵隊はその間
の事情など知るわけはなかつた。

池の水は無くなつたが、今度は敵が堤防に穴を明け

て銃眼として裏から射つて来る。池には水は無いが泥
だらけで前進攻撃出来ない。私や工藤など五名の第九
中隊が守っている。敵の方も池の泥の中を渡つて逆襲
に來られない。最後の目標岳塰山は右前方にあり、通
路がある。岳塰は今は公園になっている（先年、部隊
生き残りで訪問した）が二〇〓三〇メートルぐらいの
丘だ。

五八高地のことが連隊史に書かれているが、

『黒瀬連隊長は、我が交通を脅かすエビ高地前面
の五八高地の夜襲確保を引き続き、配属の渡辺大隊
（第三十四師団Ⅱ樁Ⅱ第二一八連隊Ⅱ針谷支隊の第
三大隊）に命じた。薄暮に乗じて、李家村東端に進
出した渡辺大隊は、大隊長の陣頭指揮により夜襲を
敢行、夜半に到り五八高地の東半分を奪取した。』

十八日早朝、連隊は現在の線を確保しつつ次期攻
撃を準備すべしと、師団命令を受領した。敵防御の
核心、岳塰高地を目前に望みつつ再び総攻撃の矛を
収めざるをえなかつたのである』

この五八高地に取り付いて我々兵隊は防いでいた

わけで、その時も、これまで良く生き残ったものだと
思っていただけで、連隊のことはまだしも、師団や、
軍がどうなっているのかは知る由も無い。ただ、目標
はあの岳塀山だということだけでした。

とにかく、衡陽攻略は予定をはるかに越えていた。

そのため第十一軍は、第五十八師団（広）を投入して
衡陽北半分を攻撃させ、第一一六師団（嵐）、第六十
八師団（檜）三個師団により、八月四日から最後の総
攻撃を行う。そのため我々「嵐」と「檜」との戦鬪地
境の変更があった。我々は知らないことだったが、岳
塀高地は第六十八師団の戦鬪地境内になったという。

これにより、七月二十八日、第三次総攻撃の師団命
令が出て、八月二日朝、連隊長は五六高地に進出し、
前に述べた五八高地前の貯水池を歩兵砲中隊に命じ決
壊射撃をさせたのだと、これは連隊本部で連隊長の騎
馬伝令をやっていた萩原さんから聞いて初めて知りま
した（萩原氏同席）。

しかし、もっと早く貯水池を決壊させていれば、池
底が乾いて、前面への突撃路として使われたものを、

と惜しまれていたようです。

総攻撃の日は八月四日ということで、第一線の大隊
は突撃支援射撃に膚接して（例の池の堤防に沿って）、
目標の家屋に突入したが、後続隊は天馬山からの敵側
防射撃で突進出来ず、結局突撃は失敗した。数度にわ
たる突撃も成功しないで、連隊旗を前線に推進し、最
後の連隊突撃を決意するに至ったという。連隊として
は実に悲壮なことです。

我々には八月七日でしたか、「明朝未明総攻撃を開
始する」と命令があった。明け方、ようやく薄くあた
りが見えるようになった時、岳塀頂上に白旗の上がつ
ているのが見えた（岳塀は第六十八師団正面で八月七
日夜上があったらしい）。「えらいこっちゃ、降参したぞ」
と叫んだが、各隊に連絡が取れぬ。その時まで、我が
連隊の攻撃目標「エビ高地」の敵は岳塀の降伏は知ら
なかったようだった。

―降伏は八月七日ですか、方先覚衡陽防衛の司令官
は、それより前に降伏を知らせて来たかと聞きまし
たが、とに角、あちらも混戦で、連絡も命令も充

分取れなかったのでしょうか、その後はどうなりましたか。

降伏というので、城内へ入ったの様子を一寸お話ししましょう。まず我々は最後まで戦闘をやり、五八高地で一昼夜明かした時、岳塀が憎かった。明日こそ落すぞと思っていた。

ところが、その後街に入って、我々は数名一団となって中国銀行や公の建物に入ったところ、中国軍の負傷者が一杯収容され、皆悲鳴をあげていて、悲惨なものだった。

中国銀行の先に二〇メートルぐらいの道路がある。そこには白旗をかかげ、銃を逆にした中国兵が五列縦隊で、千とも万ともいる。我々は五、六名で行ったのだから、びっくりして、度肝を抜かれた。戦闘中は夢中だが、戦闘終わって降伏者が沢山出て来たのだから、逆にびっくりした。

一フィリピンのバターン、コレヒドール要塞が陥落した時、降伏兵が何万と、続々出て来たので、第十六師団の兵隊さんはビックリして処置に困った

と聞きますが、今のは第一一六師団の人が衡陽の俘虜で驚いた。

同じ京都師団管区の両師団が、昭和十七年と十九年に同じ体験したのも奇しき縁ですね。

では、遡って、四十日間の衡陽攻略戦での、ご苦労をもう少し聞かせて下さい。

エビ高地攻略で、我が第一三三連隊、特に黒瀬連隊は悲壮だった。前に申したように、八月四日頃連隊長は「軍旗を捧持して、エビ高地へ突っ込む」と命令を出された。そのため、馬匹名簿やその他の書類も焼却した。だから先程言ったように、岳塀が憎かった。必ずエビ高地を陥すぞと決心していた。「よくもここまで命がもった。沢山戦友が死んでいるのに」と思った。

衡陽の敵は頑強だった。それに米空軍の銃爆撃も盛んだった。しかし、眼下に衡陽を見渡し、各砲を据え、総攻撃を命ぜられたのがたしか七月一日頃でしたか。それから四十日間、雨が降ろうが槍が降ろうが、赤土の壕のただけで生きていた。二日間で陥す、占領するつもりだから食糧は二日間分しか持っていない。着の

み着のままの四十日間だった。そのためアメーバ赤痢患者が沢山出た。水の補給は無いのだから、三四高地の側の池へ夜水を飲みに行く、七月の暑い最中、炎天下壕の中だ、池の水を水筒一杯飲む。

池の中に敵の死骸が腐敗してボンボンに脹れて浮いている。そんな生水を飲んだらいけないことは判っている、喉の渴きを、日中一杯我慢しているので、夜出て腹一杯池の水を飲む。赤痢になるのは当然です。そのため、血便、粘血便のたれ流し、蠅が死体にも、便にもとまって、赤痢菌をばらまく、そんな生活が毎日だった。

食糧の補給もなかなか無いのだが、湖南省は穀倉地帯で、後方では七月十五日稲を刈った。それが全部もち米だった。もし米が収穫出来なかつたら、米のとれるのが遅かつたら衡陽攻略はもっと遅れていたし、蒋介石総統は、衡陽救援のため、何個師団も集めて日本軍を包囲しようと作戦を開始していたから、勝敗も判らなかつたかも知れませんか。

―衡陽攻略後はどうしたのですか。

黒田舗という所に三ヶ月ぐらいいたが、憲兵と宣撫班が来て、軍隊は悪いことは一切出来ない。敵襲などあつて戦闘しても我々部隊は一般住民、非戦闘員に対しては何もしない。治安を第一としていた。最近でも、中国で日本軍は悪いことをした住民をどうこうした、などマスコミが言ったり書いたりしているが、戦闘はしても非戦闘員には何もしていない。占領すれば直ぐ憲兵や宣撫隊が入り、悪いことをした兵隊がいれば、どんどん摘発逮捕され、軍法会議にかけられる。刑法は民間と比較すれば大変酷しいものだ。兵隊など手も足も出せないほど生やさしいものではなかつた。

終戦後、上海まで来たが、その途中、中国共産党の新四軍と会った。彼等は兵器を新四軍に渡せば無事に通してやると、戦勝国を笠に着て、また兵器を蒋介石の国民政府軍に渡させまいと、強行に脅迫してきた。

部隊は南京まで、兵器も弾薬も持っていたので、砲列を敷いて新四軍を砲撃し、彼等を撃退した。重い弾薬を持って行くより、脅かす共産軍を逆に脅し、荷を

軽くして行こうというわけです。そのため、国民軍と一緒に、私が長で歩哨に立つという奇妙な体験もしました。

衡陽作戦後は芷江作戦でしたが、私はその時大腿部盲貫銃創を受けたが、傷病恩給も年金も貰わぬまま、この通り生き抜いています。

―常徳、衡陽、芷江の三作戦参加の生き残りの浦田さんのお話し有難うございました。なお、嵐師団の衡陽作戦時の戦没者の概表を掲載しておきます。

戦死：計一、五八八名(内第一三三連隊、五六三名)。
戦傷死：計 四六一名(内第一三三連隊、二〇〇名)。
戦病死：計一、四二〇名(内第一三三連隊、五〇六名)。

死亡：総計三、四六九名

(内、師団司令部一四名、

歩兵第一〇九連隊 四九二名、

同一二〇連隊 一、〇一〇名、

同一三三連隊 一、二六九名、

野砲兵一二三連隊 二五二名、

工兵一一六連隊 一四七名、

輜重兵一一六連隊 一二二名、

通信隊・衛生隊・第一・第二・第三野戦病

院・防疫給水部・病馬廠・兵器勤務隊 計

一六三名)。

昭和十三年六月―昭和二十一年六月まで

歩兵第百三十三連隊、本部直轄、大隊別

戦没者数

連隊本部、砲、通信、連隊機関銃、乗馬小隊、行

李

小計 四六二柱、

第一大隊 一、三五〇柱

第二大隊 一、三〇四柱

第三大隊 一、二六四柱

所屬不明 一五八柱

総合計 四、五三八柱

地域別戦没者

三重県市部 二、〇八〇柱

郡部 一、四六二柱、

県外 (滋賀・京都・福井・奈良・東京・埼

玉・神奈川・愛知・大阪・広島・福

岡・長崎・その他)

八三八柱。

*嵐・槍両兵団の部隊有志を中心とした方々が激戦地衡陽市廻雁峯に、時計台(太陽電気)を、戦後四十年を記念して建立されている。

日中両国の末永い友好親善を願う証であり、日中両軍戦没者に対する慰霊の精一杯の気持ちであると「一三三三会報」に掲載されている。

(会報は三重県津市萩原祐氏より社団法人・軍短協会に送付された。紙面を借りて謝意を表します。

星澤 実)

白虎部隊従軍記 (中支戦線)

福島県 若林

保

歩兵第六十五連隊歌

一、維新の華と謳われし

白虎隊士の熱血を

享けし誉の武士が

今決然と膺懲の

正義の戦進め行く

白虎その名ぞ我が部隊

二、輝く御旗さきがけて

上海江陰南京も

鎧袖一触大和魂

徐州大別死を越えて

曠野を圧す勝鬨譜

白虎その名ぞ我が部隊

三、転戦山河幾千里